

## 任意団体 子どもたちに海で遊んで欲しい。

いわき市

橋本 孝一 いわき地域環境科学会

取材日 2012.08.02

環境問題に関心を持つ人々の情報交換等を通して会員相互の学識の向上、環境の質の向上への寄与を目的として設立。大震災後は、津波被害の軽減効果があった海岸林の調査や海岸域の放射線量調査を行ない、海岸環境の安全性を確認する活動を進め、災害に強いまちづくりを目指し、海岸での環境学習やレクリエーション復活のための事業を開始した。

### 3月11日 14時46分

車で湯本駅近くのコンビニに寄ろうかと思った時に、大きな揺れが来た。はじめは車がパンクしたのか、あるいは道路のせいかと思った。コンビニではみんなが外に出ていた。車から降りようとしたが揺れのせいで降りられなかった。用事があったのである程度落ち着いてから予定通り目的地に向かった。揺れが強いという実感はあったが、これほどまでの被害になるとは予想もしておらず、訪問先で「揺れが凄かったね」とスタッフの方と話していた。

家に帰ると本棚はすべて倒れていて、これまでにない規模の地震だなと思った。停電にはならなかったのでラジオやテレビで被害の凄さを知った。比較的海岸に近い四倉に嫁いでいた娘から、家が床上浸水になり、こたつの上のものがかろうじて流されないくらいまで水がきたのだと聞いた。子どもも生まれたばかりで、大変な思いで避難をしたようだ。いわきではこれまで津波が来ても数十cm程度で、それ以上の津波が来ることは想像もしていなかった。

4月になってから、所属しているいわき地域環境科学会のスタッフと現地を見に行った。橋脚と陸地の段差、地盤沈下、車が家に突っ込んでいる様子を目の当たりにした。一気に衝撃を受けたというより、被災の現場を見るにつれじわじわと事態の深刻さを実感していった。

被災の状況を確認して、記録にも残そうと仲間たちと話し合った。環境科学会では海岸で子どもたちに環境学習を行なっており、永崎海岸でごみの調査などを行なってきた。今後も継続できるのかという不安もあり海岸を調査して回った。いわきの場合、津波の高さが海岸林を超えるほどではなかった。そのため背後地の家が助かった。また、横川という川が防波堤のように受け皿となって被害を少なくしたこと、一方では防波堤が機能しなかったことなど、調査の中でいろいろなことが解ってきた。防波堤やテトラポットは景観上問題が多いと思っていたが、これらが津波の抑制効果



に役立つようだ。

### 福島第一原発事故

まさかそんな大きな事故が起こり、自分の身に降りかかるとは思ってもいなかった。まわりでは避難している人がたくさんいると聞いたが、原発からの距離を考えるとそんなに急に避難をしなくてもよいのではと思い、普通に生活していた。遠方の親戚から「いつでもいいから避難して来たら」と言われたが、「大丈夫、心配しなくていいよ」といわきに居た。郡山に義兄がいたので、避難がてら3月14日から2泊した。後で知ったのだが、その頃はむしろ郡山の方が線量は高かったという。こうした情報をもっと早く伝えられていればよかったと思う。

いわきに戻った夜、まだガソリンが残っていたので町へ出てみると、ゴースタウンのようになっていた。原発の怖さは目に見えないだけに、それぞれの思いで避難したのだろう。隣近所でも住民は1/3～1/4ほどしか残っていなかった。GW頃になるとようやく人が戻り始めた。放射能は目に見えない分、自分の判断に任される。親の立場からすると、赤ちゃんを守るために少しでも線量を減らしたいと思うのが親心だろう。

半年ほどが経過し、いわきの線量がある程度低い

ことが分ると、仮設へ移る方も増え、車が多くなり商店街の人通りも多くなってきた。一方で地場の産業、一次産業である漁業や農業をこれまで通り営むことができなくなり、漁師や農家の方たちは私たち以上に戸惑ったと思う。

## 海岸の放射能測定活動のきっかけ

これまで、私が所属している「いわき地域環境科学会」では、子どもたちを海や川へ連れて行き、観察会などを行なってきた。ところが放射性物質が海に流されたという報道があった。海岸が汚染されているかもしれない中で果たして安全に遊べるのか、いつになったら海岸で元気に遊べるのか。それを確認するためいわきの海岸の北から南までを調査して回った。放射線に関しては素人なので、最初は福島高専にあった線量計を借りて調査をした。

計測にあたっては専門家のお話を聞き、勉強会を行なって、地表面下60cmから70cm位の深さまでを10cm刻みで計測することにした。その結果、陸地に近い方は表面の線量が少し高めで、下層部はそれほど高くない。海岸寄りの地域では、上層部は低いが下層部は少し高い。波が来ず植物が繁茂しているところは線量が低い、といった傾向を示した。陸上の粘土質の土と海岸の環境では違うことが分かったので、測定場所を工夫した。福島高専の先生方にも基礎的なデータの採取に協力をいただいた。現場ではシーベルト単位で計測するだけであるのに対し、採取した砂から放射能濃度（ベクレル単位）まで計測して信頼性のあるデータはある程度得られるようになった。

しかしながら団体内では値が持っている意味や、数値をそのまま発表することに戸惑いがあった。会の信用問題にも関わる。いろいろな専門家の意見を聞く中で、「それは貴重なデータだからぜひ発表したほうが良い」との後押しもあり、団体内でよく検討した結果、昨年12月1日に記者発表をした。新聞報道もあり、市民の方々からの問い合わせもあった。その発表を見たのか、12月中旬になっていわき市観光物産課から、海水浴ができるかどうか調査をしてほしいと依頼が来た。いわき地域環境科学会のメンバーが中心になって立ち上げたNPO法人いわき環境研究室が受け皿となり、今年の1月から3月まで毎月、15海岸の調査を行なった。結果はいわき市のホームページに掲載されている。

この地域で今の時期に調査しておくことは、世界的にも貴重なデータになるであろうという自負もある。後々になって再調査に利用できるよう、採取した砂はタッパーに入れて保管している。解釈はどうあれ、できるだけ正確なデータを残してい

くことが団体の大きな使命の一つだと思っている。また、人によって安全だととらえる基準は違うが、なるべく早い時期に子どもたちに海で遊んで欲しいと思っているので、数値を公表することで判断するための材料を提供したいと考えている。

国の方針である追加被曝線量年間1ミリシーベルトを基準とした時の、12時間屋外にいた場合の被曝線量である0.23マイクロシーベルト。これが1つの値と思っている。海岸調査の結果、0.23より高いか低いかで色分けを行なったところ、ほとんどが0.23以下であった。少しオーバーしている場所は陸地寄りにある。市ではこのデータと、津波が来た時の避難場所が確保されているかなどを総合的に判断し、勿来海岸の海開きを決定しようだ。

## 正しく怖がる必要性

海岸自体は津波による被害はあるものの、元通りになれば活動ができると思っている。ただ海岸線が大分後退しているの、子どもたちを遊ばせる場は減っている。放射線に対して基礎的な知識を持って正しく怖がることは必要だが、必要以上に怖がらなければ海岸は安全だと思っている。

もうひとつの課題は、海岸林の活用だ。震災前から林間学校の復活を考えていた。津波に対する抑制効果もあり、海岸林は保全していかなければいけないものと思っている。普段から人手が入り利用していないと林は荒れてしまう。津波の後、海岸林の背後地では、松林に不法投棄されていたゴミが津波で流れてきて、家が壊されたという話を聞いた。松林の維持管理が十分に行き届いていなかったのだろう。海岸林の放射線は値が高めで、このままでは子どもたちを遊ばせることができない。現在は、子どもたちが海岸で屋外活動をし、維持管理にも参加できるような、なるべく線量の



再調査に利用できるよう保管している砂

低い遊べる場所をリストアップしている。松林の活用に向けて整備に取り組むことが今後我々が行なうべき活動であると考えている。

## 振り返って

いわき地域環境科学会には自然エネルギーワーキンググループがある。津波被害はある程度物理的に対応できるが、原発の場合は目に見えない。ホットスポットがいたる所にある。私個人の考えとしては、原発に依存しないような社会にしていけないといけないと思う。あるセミナーで話されていた「地産地消のエネルギー」は大きく賛同できる考えだ。この事故をひとつの契機にして、自分たちでエネルギーを作り出す、そのことを通じてエネルギーの在り方や、いかに無駄遣いをしていたかを反省することができる。大震災を風化させな

いよう、町づくりの在り方、環境に対する向き合い方も考えていかなければならない。

これまでエネルギーの問題を切実には考えていなかったように思う。行政に任せっぱなしにしてしまうと他人事になり、受け身になる。今は自分たちのエネルギーは自分たちで作る、自分たちの環境は自分たちで守るというスタンスに立てる状況にあると思う。忘れてはいけないというかけ声だけではなく、現実的な手段を手に入れて展開していく、その一つの有力な手段が自然エネルギーではないだろうか。身の丈に合ったエネルギーの利用を広めることで、今回の大震災・原発事故の教訓の風化も防げるだろう。それは今後のまちづくりの在り方、国民生活の在り方にまでつながっていくのではないだろうか。

NPO

## 放射能に対する緊張感が薄れていくことも危険。

福島市

清水 義広 阿部 浩美 NPO 法人市民放射能測定所

取材日 2012.08.02

CRMS 市民放射能測定所は、放射能防護のための活動をするNPO法人。食品の放射能測定と、ホールボディカウンターによる体内残留放射能測定を中心に、福島市で市民の手による自発的な活動をしている。市民からの測定依頼を受け付けるとともに、広く情報を共有するために測定したデータはWeb-site等で公開している。

### 3月11日 14時46分

**【清水さん（写真右）】**宮城県の丸森町に住んでいる。震災当日は選挙の事務を手伝っていて、選挙事務所の中で震災に遭った。そんなにびっくりはしなかったが、時間が長かったのでただ事ではないなと思った。すぐに停電になったため、車を持ってきてカーラジオをつけた。「仙台湾で津波の高さ10m」という放送を聞いたが想像できず、信じられなかった。

**【阿部さん（写真左）】**私は東京で仕事をしていた。東京でも揺れは凄かったし時間も長かった。すぐに仕事場近くの主婦たちが外へ飛び出してきた。ツイッターで仙台駅のホームの標識が落ちている画像を見て目を疑った。テレビで仙台空港に津波が押し寄せる映像や、逃げる車を追う津波の映像を見てとんでもないことが起こったのだと感じた。



### 福島第一原発事故

**【清水さん】**丸森でラジオを聞いて知った。うまく想像できなかった。福島なのでもう少し遠いだろうと思っていたが、後になって調べてみたら意外と近かった。逆に女川のことが報道されず、福